築館町文化財調査報告書第11集

伊治城跡

－平成９年度：第24次発掘調査報告書－

平成10年３月

宮城県　築館町教育委員会

伊治城跡

－平成９年度：第24次発掘調査報告書－

平成10年３月

築館町教育委員会

土 壘 断 面

土 壘 積 土

調 査 区 遠 景

序

本町には、先人の残した貴重な歴史的文化遺産が数多く存在しております。これら貴重な歴史的文化遺産を次の世代に残していくことが、我々に課せられた責務であります。

これらの中でも、伊治城跡は日本の歴史に名をとどめる貴重な遺跡であり、伊治城跡の全体を解明していくことが、古代東北の歴史さらには、日本の歴史を解明することにもつながります。

今年度は、本町教育委員会が発掘調査の主体となってから、第3次5ヶ年計画の初年度にあたり、昨年に引き続き外郭区画施設の検出を目的に発掘調査を実施いたしました。

発掘調査の結果、旧富野小学校の校地内で土手状に残っている部分が、昭和52年に宮城県多賀城跡調査研究所が発掘調査を実施した北辺土塁の延長部分であることが確認されました。およそ1200年前の構造物が、わずかでも現状で目にすることができることは、これからの遺跡の保存活用に大いに役立つと思われます。

最後になりましたが、調査を担当していただきました、宮城県教育庁文化財保護課の皆さん、特に直接担当されました、伊藤裕技術主査、八嶋伸明技師に深く感謝を申し上げます。また、発掘調査をするにあたり、永年協力していただいている、地元の作業員の方々に心から感謝申し上げます。

平成10年3月

築館町教育委員会

教育長　南條正臣

例　　言

1．本書は、宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する伊治城跡の平成9年度発掘調査（第24次調査）の成果をまとめたものである。

2．調査は、国庫補助事業計画にもとづくものであり、築館町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課・築館町教育委員会が担当した。

3．調査時における地区割りは、城生野公民館前の伊治城跡「原点1」を基準点（0.0）とし、この点と「原点2」とを結ぶ線を基準として直角座標を組み、割り出している。基準線の南北軸は2°8′8″西偏する。基準点の座標値（第X系）は以下のとおりである。

原点1　X＝－137,175.996　　Y＝18,059.271

原点2　X＝－137,172,798　　Y＝18,145.712

図中の地区割り：W－150、S－400などの表記は、原点1から西に150m、南に400mであることを表す。

4．本遺跡の位置を示した地形図（第2図）は、建設省国土地理院発行の1／25,000の地形図「金成」、「築館」を複製して使用した。

5．本書のⅠ・Ⅱ章の文章および付表1・2は第22次・第23次調査報告書から転載し、一部加筆したものである。

6．図中の方位は座標北を示している。

7．土色の記載は「新版標準土色帳」（1973）にもとづいた。

8．本書の作成は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、課員の検討を経て、伊藤　裕が編集・執筆した。

9．発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品は、築館町教育委員会が保管している。

10．なお、これまでの本遺跡の発掘調査および調査報告書（13冊）については、本文の後の付表1にまとめて示してある。

調 査 要 項

1．遺　跡　名　伊治城跡（宮城県遺跡登録番号：41007）
2．所　在　地　宮城県栗原郡築館町字城生野
3．調 査 主 体　築館町教育委員会
4．調 査 担 当　宮城県教育庁文化財保護課・築館町教育委員会
　宮城県教育庁文化財保護課　伊 藤　　裕　　八 嶋 仰 明
　築 館 町 教 育 委 員 会　千 葉 長 彦
5．調 査 期 間　第24次調査：1995年10月７日～11月７日
6．調 査 面 積　約480㎡
7．調 査 協 力　佐 藤 信 行、菅 原 祥 夫

目　　次

序
例　言
調査要項・目　次

Ⅰ．遺跡の概要……1
Ⅱ．遺跡の位置および周辺の遺跡……1
Ⅲ．第24次調査……3
　1．調査の目的……3
　2．調査の方法と経過……3
　3．基本層序……7
　4．発見された遺構と遺物……8
Ⅳ．考　察……19
　1．古　代……19
　2．古墳時代……24

引用・参考文献……27
付表1．「伊治城跡」発掘調査および報告書一覧
付表2．伊治城および栗原郡に関する古代史年表
報告書抄録
写真図版

Ⅰ．遺跡の概要

伊治城は、律令政府が陸奥国経営の一環として神護景雲元年（767）に現在の宮城県北部の栗原地方に設置した城柵である（第１図）。続日本紀や日本後紀には延暦15年（796）までの約30年間、この城柵に関する記録が登場する（付表２参照）。なかでも、この地域（上治郡）の大領であった伊治公呰麻呂が宝亀11年（780）に按察使紀広純と牡鹿郡大領道嶋大楯を伊治城で殺害し、さらに国府多賀城を攻撃し放火するという「伊治公呰麻呂の乱」は、当時の政府には衝撃的な事件であった。

この伊治城の所在地については、これまでいくつかの候補地があった。しかし、有力な擬定地であった当地の発掘調査が多賀城跡調査研究所によって昭和52年から３年間、その後昭和62年度からは築館町教育委員会・宮城県教育委員会によって毎年継続的に調査が行われ、本遺跡が伊治城であることは確実になった（付表１参照）。

これまでの調査によって、伊治城は東西約700ｍ、南北約900ｍほどの広がりをもち、台地の南東部に東西約56ｍ、南北61ｍの築地塀でかこまれた「政庁」、この政庁をさらに取り囲む東西185ｍ、南北240ｍの範囲に「官衙」域、その外側には竪穴住居群が配置されるという構成であることが次第に明らかになってきた。また、「政庁」域の建物群は大きく３時期の変遷があることや大規模な火災があったことなども確認されている（築館町教育委員会　1993）。

第１図 東日本の古代城柵（進藤1991に加筆）

Ⅱ．遺跡の位置と周辺の遺跡

本遺跡は、宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する。この場所は多賀城の北約52kmの位置にあり、多賀城と胆沢城を結ぶほぼ中間地点にあたっている。

宮城県北部の地形を概観すると、中央部に北上川が流れ、その西側には奥羽山脈が南北に大きく横たわっている。この奥羽山脈は山麓部で多数の河川によって開析され、いくつかの小丘陵に分かれている。本遺跡はその最も北に位置する築館丘陵東端部の標高20～25ｍほどの平坦な河岸段丘上に立地している（第２図）。この段丘は南西部で背後の丘陵と接続しているが、周囲を一迫川・二迫川などの河川や小さな谷によって画され、北に張り出す独立した地形をなしている。周囲の沖積面との比高差は約５～６ｍである。遺跡の範囲はこの段丘の全域にわたり、その範囲は東西約700ｍ、南北約900ｍと推定されている。

遺跡は現状では宅地や畑地・水田として利用されているが、段丘の北端部には東西にのびる長さ150mほどの空堀状の大溝と、その北に接して走る土塁状の高まりが今でも残っている。これらは、昭和52年度の多賀城跡調査研究所の調査によって伊治城跡の北辺の外郭施設であることが確認された（多賀城跡調査研究所　1979)。

本遺跡(第2図-1)の周辺には、奈良・平安時代の遺跡が多く分布する。一迫川や二迫川沿いの河岸段丘や低い丘陵上には佐野遺跡(6)、 糠塚遺跡(7)、大門遺跡(8)、御駒堂遺跡(14)、長者原遺跡(21)などの集落遺跡がある。なかでも、糠塚遺跡では奈良・平安時代の住居跡が30棟検出されており、住居跡出土土器は県北地域の国分寺下層式の基準資料になるものである（小井川・手塚 1978)。また、御駒堂遺跡は8世紀初頭に関東地方からの移住が想定されるような遺物や遺構が発見されており（小

No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	伊治城跡	段丘	城柵跡	古墳、奈良・平安	10	刈敷袋遺跡	自然堤防	包含地	縄文、古代	19	照越台遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、古墳、古代
2	栗原寺跡	丘陵	寺院跡	古代	11	刈敷館跡	自然堤防	城館	中世	20	西館遺跡	段丘	城館、包含地	縄文、中世
3	尾松遺跡	丘陵斜面	包含地	古代	12	鶴ノ丸遺跡	段丘	城館、集落跡	縄文～近世	21	長者原遺跡	段丘	集落跡	古墳、古代
4	大沢横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳、古代	13	宇南遺跡	段丘	城館、集落跡	縄文～近世	22	堀切長根遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、古代
5	鳩南横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳	14	御駒堂遺跡	段丘	集落跡	縄文～近世	23	大仏山古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳
6	佐野遺跡	丘陵	集落跡	弥生、古代	15	山ノ上遺跡	段丘	集落跡	縄文、古代	24	宮野館	丘陵	城館	中世
7	糠塚遺跡	段丘	集落跡	弥生、奈良・平安	16	木戸遺跡	丘陵	集落跡	縄文、古代	25	高田山遺跡	丘陵	包含地	縄文、古代
8	大門遺跡	段丘	集落跡	縄文、奈良・平安、中世	17	佐内屋敷遺跡	丘陵	集落跡	縄文、弥生、奈良・平安	26	薬師山北遺跡	丘陵斜面	包含地	古墳
9	狐塚遺跡	段丘	窯跡	古代	18	嘉倉貝塚	丘陵	貝塚	縄文、弥生	27	築館城跡	丘陵	城館	中世、近世

第2図　伊治城跡と周辺の遺跡

井川・小川 1982)、栗原郡の建郡（神護景雲3年：769）以前のこの地域の動向を知る上で注目される。

なお、本遺跡の東4kmは、志波姫町弧塚遺跡（9）、さらに北方6kmには須恵器や瓦を焼成した金成町小迫観音窯跡があり、これらの製品が本遺跡にも供給されていた可能性がある。

Ⅲ．第24次調査

1．調査の目的

伊治城跡の調査は平成3年度に政庁域の建物群などが検出された後、これをとりまく内郭地区とその周辺を中心に進められてきたが、平成7年度以降は外郭区画施設の確認を目的として調査を行っている。

外郭区画施設の遺構が明確に確認されているのは昭和52年度の宮城県多賀城跡調査研究所による調査地点（第3図①次）で、台地の北辺に沿って東西に延びる幅約10mの大溝（ＳＤ02）、大溝の北側に構築された土塁（ＳＦ03）、大溝の南側で土塁状遺構（ＳＦ01）が検出されている。その後、道路拡幅に伴う調査の際に同地点の西方約240mで、上記の大溝の延長と見られる東西方向の溝と、その北側を並行して延びる幅2mほどの溝が検出されている（同図12次）。

これ以降台地の東辺で1地点、西辺で2地点の調査が行われている。狭い調査区や後世の削平のため土塁などは検出されていないが、南北方向に延びる溝跡とその外側の土取り痕（同図16次）、溝跡とその内側（内郭側）で並行する2条の土取り痕が検出されている（同図22次・23次）。

現在、溝跡は外郭区画施設の可能性があり土取り痕は土塁などの区画施設構築に伴って掘られたものと考えられているが、調査された各辺の状況には相違点があり、外郭区画施設の具体像を把握することは未だ困難な状況である。

そこで今回の調査は、昭和52年度調査で検出されている土塁ＳＦ03や大溝ＳＤ02の延びをあらためて確認し、あわせて大溝の内側で検出された土塁状遺構ＳＦ01の性格を解明することを主目的として、外郭北辺を対象に実施した。

2．調査の方法と経過

調査地点は伊治城が立地する台地北端のやや北に張り出した部分で、東西を沢によって区画されている。周囲の水田面との比高差は3.7～4.6mである。伊治城政庁の築地北辺からは北へ約590m離れており、第12次・第18次調査地点とはほとんど接している。また、宮城県多賀城跡調査研究所による昭和52年度調査地点からは西へ約200mの地点となる。

この部分は最近まで町立富野小学校の校地であったが、同校が北東約50mの水田部分に新築移転したため、現在は築館町出土遺物管理センターの敷地となっている。敷地北側には平面形が凹形で高さが1～1.5mの段がついており、低い部分は藪となっている。

調査は10月6日から開始した。調査区の設定にあたっては樹木の撤去が制限されていたため、東方で観察される土塁と大溝の痕跡の延長線を念頭におき、旧校地北側の段を跨ぐ南北のトレンチを最初に設定して（南北区）、重機による表土除去を開始した。

①～③次：宮城県多賀城跡調査研究所
1～24次：塩釜市教育委員会
（付表1を参照のこと）

第3図　調査区と周辺の地形

南北区の北側では表土直下で地山のローム層が露出し、東西に延びる幅約9.5ｍの大溝や南北方向の溝などを確認した。大溝は規模や方向からみて外郭大溝（ＳＤ02）の延長と考えられたが、宮城県多賀城跡調査研究所が検出した土塁ＳＦ03の延長部は確認されなかった。

東西区では土塁、土取り痕、土壙、溝跡、竪穴住居跡、円形周溝などを確認し、土壙ＳＸ456・463・482、土取り痕ＳＸ460・477と、竪穴住居跡のうち最も規模が大きいＳＩ457を完掘した。

南北区の北端で確認した南北方向の溝は、南北区中央部でその延長と見られる部分を確認したため一部掘り下げを行なった（ＳＤ483）。東西区東端でもその延長を確認するため調査区を一部拡張したところ、重複する４条の溝跡を検出した（ＳＤ491ａ～ｄ）。

精査や記録等がほぼ終了した11月１日には、地元対象の説明会を現場において開催し、その後若干の補足調査などを行い、11月７日には調査のすべてを終了した。

なお調査区内のグリッドポイント設定や諸記録は、例年の調査と同様の方法で行っている。

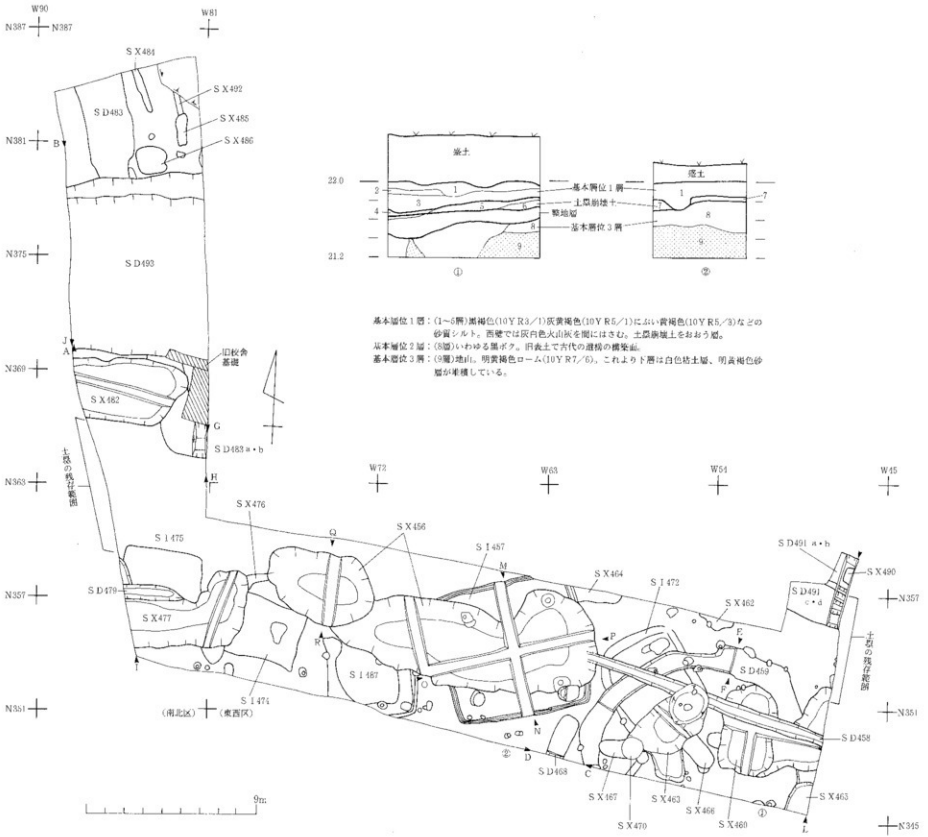
３．基本層序（第４図）

現在の表土は厚さ10～50㎝の盛り上層である。主として小学校の校地造成時のもので、南北区北側ではＳＤ493堆積土・旧表土・地山のローム層の直上に堆積する。盛り土以下の層は３枚に大別される。

基本層１層：土塁崩壊土を覆って堆積している層。土塁の高まりより南側に分布する。厚さ20～40㎝で７～８枚に細分され、西壁では灰白色火山灰を間にはさむ。黒褐色（10ＹＲ3／1）灰黄褐色（10ＹＲ5／2）にぶい明黄褐色（10ＹＲ5／3）などの砂質シルトである。

基本層２層：旧表土。古代の遺構の構築面で、いわゆる黒ボクである。厚さ20～30㎝でＳＤ493以南の調査区のほぼ全体に分布する。

基本層３層：地山。明黄褐色ローム（10ＹＲ7／6）である。これより下層は白色粘土層、明明黄褐色砂層が堆積している。



基本層位1層：(1～6層)黒褐色(10YR3/1)灰黄褐色(10YR5/1)にぶい黄褐色(10YR5/3)などの砂質シルト。西壁では灰白色火山灰を間にはさむ。土器崩壊土をおおう層。
基本層位2層：(8層)いわゆる黒ボク。旧表土で古代の遺構の構築面。
基本層位3層：(9層)地山。明黄褐色ローム(10YR7/6)。これより下層は白色粘土層、明黄褐色砂層が堆積している。

第4図　基本層序・遺構配置図

4．発見された遺構と遺物

土塁1条、溝跡5条、竪穴住居跡5軒、土取り痕3基、土壙などを検出した（第4図）。

これらの遺構は古代・古墳時代・年代不明のものに分けられるが、検出数も多くはないため、事実記載は種類ごとに行っていく。

土　塁

［ＳＦ489］　第5図

ＳＤ493大溝の南側をほぼ東西方向に延びる土塁である。高まり部分の残存高は東側が0.15～0.35m、西側が約0.9mで、西側ほど残存状況は良い。

構築方法は、高い部分では旧表土・地山の削り出し、低い部分は整地（Ⅱａ層）によって幅約7mの基底部を作り出して構築している。積み土（Ⅱｂ層）は5枚に細分されるが、いずれも黒色土やローム・白色粘土のブロック（径0.5～5㎝）を多量に含み、しまりがある。

基底部の南側と北側裾には、崩壊土（Ⅰ層）が堆積している。また西壁の南寄りでは、Ⅰ層より上位に灰白色火山灰の堆積が認められる。

溝　跡

［ＳＤ493］　第6図

南北区北側の地山ローム層上面で、幅約9.5mの東西に延びる溝跡を検出した。ＳＤ483と重複しておりこれより新しい。

検出部は東西約7mで、縁辺はおおむね直線的に延び、幅は西側でやや狭まっている。底面までの掘り下げは行っていないが、中央部の攪乱を除去した部分での観察結果から、深さは1.2m以上と推定される。北側の壁は上部にゆるい段がつく。

上層のみの所見だが堆積土は自然堆積である。なお断面図にはかかっていないが、検出部中央付近では、堆積土4～6層の下位約20㎝の部分に灰白色火山灰の堆積が認められた。

堆積土から須恵器や土師器の破片が出土しているが、図示できるものはない。

［ＳＤ468］　第7図

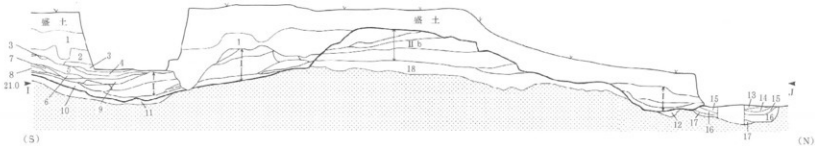
東西区の南壁付近で一部検出した溝跡である。南壁断面での幅が約2m、深さが約75㎝あり、段のつく逆台形状を呈する。堆積土は自然堆積である。

図示できる資料ではないが、堆積土下部からロクロ使用の土師器長胴甕の口縁部破片が出土している。

［ＳＤ459］　第8図・第9図

東西区の東端に位置する、円形に巡ると考えられる溝跡で一部掘り下げを行った。ＳＩ472、ＳＤ458、ＳＸ460と重複しており、ＳＩ472より新しくその他より古い。規模は溝間の中心距離が東西約11mで、溝の幅は約1.5m、深さは約20㎝で断面形は逆台形状である。堆積土は上部が黒褐色の自然流入土、下部が崩壊土である。伊治城におけるこれまでの調査例から本遺構は古墳の周溝と見られるが、墳丘の盛り土などは残存していなかった。

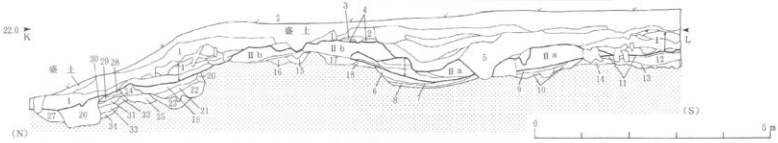
掘り下げ部分から土師器が出土している。図示できたのは2点である（第9図1．2）。



〔南北区西壁〕

Ⅰ：土塁の崩壊土　Ⅱb：土塁の種土

層	土色	土性	特徴／備考	層	土色	土性	特徴／備考
1	黒　褐 10YR4/1	砂質シルト	均質	10	黒　褐 10YR3/1	シルト	
2	黒　褐 10YR3/1	砂質シルト		11	灰　白 10YR8/2	粘土	18層がブロック状に多量に混じる　SX477
3	灰　白	火山灰		12	黒　10YR2/1	シルト	多量のローム ブロックを含む
4	黒　褐 7.5YR3/1	砂質シルト		13	黒　10YR1.7/1	シルト	SX482
5	黒　褐 10YR3/1	砂質シルト	均質でしまりなし	14			焼土塊　〃
6	灰黄褐 10YR5/2	砂質シルト		15	黒　10YR2/1	シルト	ローム ブロックを少量含む　〃
7	灰黄褐 10YR5/2	砂質シルト	ローム粒子を不均質に含む	16	黒　10YR1.7/1		ローム ブロックを多く含む　〃
8	灰黄褐 10YR4/2	砂質シルト	しまりなし	17	黒　10YR1.7/1	シルト	ローム層を縞状に含む　〃
9	灰　白 10YR8/2	粘土	地山起源の層	18	黒　10YR1.7/1	シルト	旧表土



〔東西区東壁〕

Ⅰ：土塁の崩壊土　Ⅱa：基礎整地　Ⅱb：土塁の種土

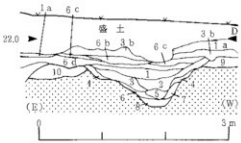
層	土色	土性	特徴／備考	層	土色	土性	特徴／備考
1	黒　褐 10YR3/1	砂質シルト		12	褐　灰 10YR4/1	砂質シルト	ローム ブロックを多量に均質に含む　SX465
2	黒　褐 10YR3/1	砂質シルト	ローム・白色粘土を不均質に含む	13	黒　10YR1.7/1	砂質シルト	ローム ブロックを不均質に含む　〃
3	灰黄褐 10YR4/2	砂質シルト	ローム・白色粘土を不均質に含む	14	黒　10YR2/1	砂質シルト	ローム層を不均質に含む　SD489
4	黒　褐 10YR3/1	砂質シルト	均質	15	黒　褐 10YR3/1	砂質シルト	ローム粒子を不均質に含む
5	黒　褐 10YR3/2	砂質シルト	均質でしまりあり	16	暗　褐 10YR3/3	砂質シルト	摩擦層を含む
6	灰黄褐 10YR4/2	砂質シルト	ローム層を縞状に含む　SX460	17	黒　10YR2/1	シルト	しまりなし
7	黒　褐 10YR3/1	砂質シルト	旧表土層と同一	18	黒　10YR1.7/1	砂質シルト	ローム層を含む
8	黒　褐 10YR3/1	砂質シルト	ローム ブロックを一部に含む　〃	19	黒　褐 10YR3/2	砂質シルト	焼量の焼土を含む　SD491d
9	黒　褐 10YR3/2	砂質シルト	ローム層を不均質に含む　〃	20	黒　褐 10YR3/2	砂質シルト	旧表土層のブロックを含む　〃
10	黒　褐 10YR3/2	砂質シルト	黄褐色砂層（地山起源）を含む　〃	21	黒　10YR2/1	砂質シルト	摩擦層のブロックを含む　〃
11	黒　褐 10YR3/2	砂質シルト	ローム層を少量含む　〃	22	暗　褐 10YR3/3	砂質シルト	摩擦層の崩壊土　〃

層	土色	土性	特徴／備考
23	暗　褐 10YR3/3	砂質シルト	ローム ブロックを多量に含む　SD491c
24	黒　褐 10YR3/2	砂質シルト	白色粘土層のブロックなどを含む　SD491b
25	暗　褐 10YR3/3	砂質シルト	ローム層を縞状に含む　〃
26	黒　褐 10YR3/1	砂質シルト	27～30層を掘り返した土　SX490
27	黒　褐 10YR3/2	砂質シルト	ローム ブロックを不均質に含む　SD491a
28	黒　褐 10YR3/1	砂質シルト	〃
29	黄　褐 10YR5/4	砂質シルト	〃
30	黒　褐 10YR3/1	砂質シルト	〃
31	黒　褐 10YR3/1	砂質シルト	ローム層を不均質に含む　〃
32	明黄褐 10YR6/7	ローム	地山の崩壊土　〃
33	黒　10YR1.7/1	砂質シルト	旧表土の流入　〃
34	明黄褐 10YR6/7	粗砂	壁の崩壊土　〃

第5図　SF489　土　塁

図	色	土	質	色	質	備	考	図	色	土	質	特	徴	備	考
1	黒	10YR5/1	砂質シルト	炭やしまりなし				9	黒	10YR3/1	シルト				
2	黒	10YR4/1	砂質シルト	白色				10	黒	10YR3/2	シルト				
3	黒	10YR4/2	シルト	黒山ブロックをわずかに含む				11	黒	10YR3/2	シルト				
4	黒	10YR3/2	シルト					12	黒	10YR3/1	シルト				
5	黒	10YR4/1	シルト	暗小礫を不均質に含む				13	黒	10YR3/2	シルト	赤白砂礫土を少量含む			
6	黒	10YR4/1	シルト	暗小礫を少量含む				14	黒	10YR3/2	砂質シルト				
7	黒	10YR4/1	シルト	暗ブライ化 暗小礫を少量含む				15	黒	10YR3/1	砂質シルト	しまりなし			
8	黒	10YR3/1	シルト					16	黒	10YR3/1	シルト	ラーメンフロックを少量含む			

第6図　ＳＤ493



（1ａ＝基本層位１層　3ｂ・６ｃ～ｄ＝土草崩壊土）

図	色	土	質	特	徴	備	考
1	黒	10YR3/1	砂質シルト				
2	黒	10YR4/1	砂質シルト				
3	黒	10YR3/2	砂質シルト				
4	黒	10YR3/2	砂質シルト	地山の崩壊土含む			
5	黒	10YR3/1	砂質シルト				
6	明黄	10YR6/2	ローム	地山の崩壊土			
7	黒	10YR3/1	砂質シルト	地山ブロックを少量含む			
8	黒	10YR3/1	砂質シルト	地山ブロックを多量含む			
9	黒	10YR3/2	砂質シルト	旧表土			（基本層位２層）
10	黒	10YR2/1	砂質シルト	地山のブロックを不均質に含む			

第7図　ＳＤ468

１は高坏の脚部で、中空で円錐台状の器形と見られる。円窓はやや小型で２個残存している。外面調整は縦方向のヘラミガキである。

２は台坏甕の脚部で、裾部はやや直線的に開くと考えられる。調整は外面がヘラケズリ、内面は刷毛目である。

そのほか縄文土器の破片が出土している。

［ＳＤ483］　第８図・第９図

南北区北側・中央部付近で検出した溝跡で、一部掘り下げを行った。ＳＤ493、ＳＸ482と重複しておりこれらより古い。また１度の掘り直しが行われている。

検出部は旧校舎基礎やＳＤ493に一部破壊されているが、南北区北側から延びる一連の遺構であり、ある範囲を区画する溝の西辺と南西隅、および南辺の一部と考えられる。

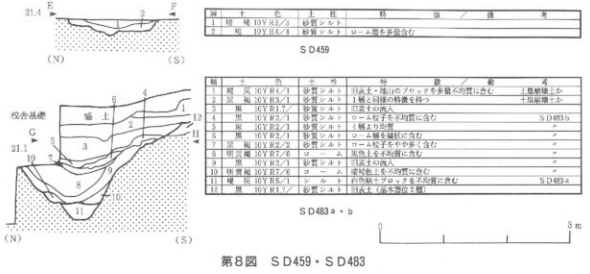
掘り直し後の溝ｂは上幅約2.5ｍ、下幅約0.8ｍ、深さ約１ｍで断面は逆台形状を呈する。堆積土は自然堆積である。

掘り直し前の溝ａは深さ約20cmが残存している。堆積土は白色粘土ブロックを不均質に含む。

主にｂから土師器が出土している。図示できたのは11点である（第９図３～13）。

３は高坏の坏部で、口縁部は内湾しつつ外傾する。調整は内外面とも丁寧なヘラミガキである。

４は小型器台である。貫通口は径約1.4cmと大きく、１個残存する円窓も大型である。外面調整はヘラミガキである。なお外面は赤彩されており貫通孔内面にもその痕跡が残っているため、受け部内面も赤彩されていたと考えられる。



第８図　ＳＤ459・ＳＤ483

５は坏である。口縁部は緩く内湾しつつ外傾し、体部は半球形で口縁部との間にくびれを持つ。調整は内外面ともヘラミガキである。

６は壺で、口縁部は長く直線的に外傾する。調整は口縁上端部がヨコナデ、以下はヘラミガキである。

７は壺で、口縁部は短く外反し、頸部を巡る隆帯に円形の刻みがつく。外面の調整はヨコナデ、ヘラミガキである。

８は複合口縁の壺である。口頸部は短く外傾する。調整は口縁部～頸部が刷毛目・ヘラミガキ、体部はヘラミガキである。

９は甕である。口縁部は短く外反し、体部は丸みを帯びている。調整は口縁部から体上部にかけてヨコナデ、以下は刷毛目、ヘラミガキである。口縁部外面にススが付着する。

10も甕で、口縁部は外傾する。外面調整は口縁部が刷毛目、ヨコナデ、体部は刷毛目、ヘラミガキである。

11は甑である。口縁部は折り返されて肥厚し、体部はやや内湾気味に立ち上がる。調整は内外面とも刷毛目で、口唇部上端も面取りされている。

12、13は上層から出土した土師器で、12は甕の底部、13は長胴甕である。13は口縁部が強く外反し頸部との境に沈線が巡る。外面調整は口縁部がヨコナデ、体部が刷毛目、ヘラケズリである。

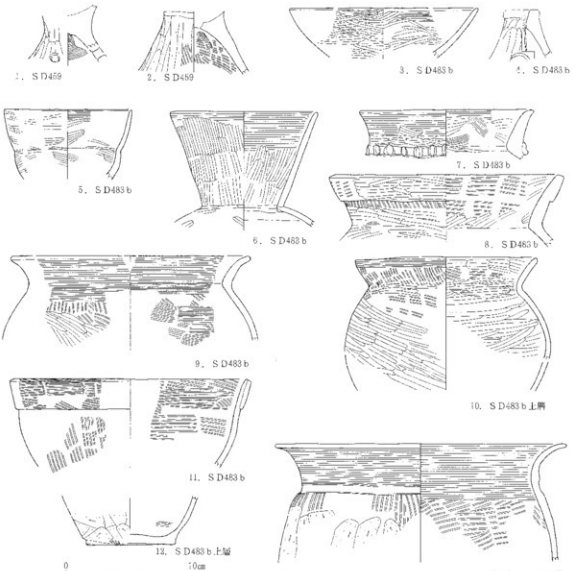
ａからも土師器が出土しているが、細片であるため図示できるものはない。

［ＳＤ491ａ～ｄ］　第５図

東西区の東端で一部検出した４条の溝跡で、土壙ＳＦ489と重複しておりこれより古い。またａ、ｂ、ｄは土壙ＳＦ489の構築時に上部を削平されている。溝跡の検出部はいずれも東西に延びており、切り合いからａ（古）→ｂ→Ｃ→ｄ（新）と変遷していることがわかる。

最も古いａは上幅２ｍ以上深さ約50cm以上で、中央部をＳＸ490に破壊されている。堆積土は自然堆積である。

ｂは深さ30cm以上、下幅約40cmで南側がｃ、ｄに破壊されているが、断面は逆台形状と推定される。堆積土は白色粘土ブロックなどを含む崩壊土である。



第9図　SD459・SD483b出土遺物

cは、dの下位に一部残存している。残存部分は上幅約70cm深さ約20cmほどである。堆積土はロームブロックなどを含む崩壊土である。

最も新しいdは上幅約1.9m下幅約1.1m深さ約40cmで、底面はほぼ平坦である。北壁は緩く立ち上がるが、南壁の立ち上がりは急角度でオーバーハングしている。堆積土はいずれも自然堆積層である。

なおa～dの掘り下げ部分からは、遺物は出土していない。

5軒を検出したがＳＩ457のみ掘り下げを行った。

［ＳＩ457］　第10図　第11図

［位置・重複］　東西区のほぼ中央部にあり、ＳＤ458、ＳＸ456、ＳＸ464と重複している。ＳＤ458、ＳＸ456より古くＳＸ464より新しい。

［規模・平面形］　ＳＸ456に大きく破壊されているが、１辺約6.7ｍの正方形と推定される。

［堆　積　土］　壁寄りの部分に２枚の層が残存する。褐色ないし暗褐色の砂質シルトでいずれも自然堆積である。

［壁・床面］　壁は地山でほぼ垂直に立ち上がっており、残存部の最大高は約30cmである。住居掘り方埋め土の上面を床としており、床面はおおむね平坦で固くしまっている。

［床面施設］　周溝、ピットを検出した。

周溝は上幅20～40cm、深さ13～32cmで断面はＵ字状を呈する。ＳＸ456に破壊されているため、全周していたかどうかは不明である。堆積土は壁の崩壊土を含む自然堆積である。

ピットは長軸約1.1ｍ、深さ28cmの楕円形で壁は急角度で立ち上がっている。堆積土はしまりのない暗褐色砂質シルトである。

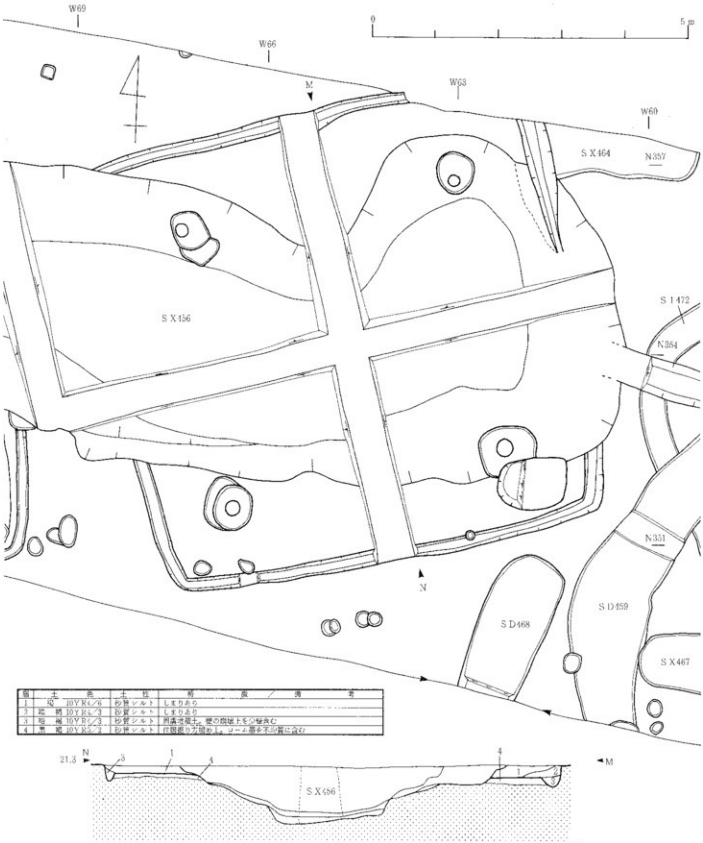
［柱　穴］　柱穴は住居平面形の対角線上で４個確認された。南側の床面で確認した２個は１辺70～80cmの隅丸方形のものと、長軸約70cmの楕円形のものである。北側の２個はＳＸ456の底面に残存していたもので、床面からの深さは約73cmである。いずれの柱穴も柱痕跡は径20～30cmの円形である。

［出土遺物］　堆積土および周溝から土師器などが出土した。４点のうち図示できたのは３点である（第10図）。１は高坏の脚部である。中空で裾部が大きく八の字に開く。径約１cmの円窓が１個残存する。外面調整は縦方向のヘラミガキで、外面に赤彩の痕跡が残る。２は坏あるいはミニチュア土器である。体部は小振りな半球形で、外面調整はヘラケズリである。３は台段口縁の壺である。頸部はわずかに外反し口縁部の段も屈曲が弱い。外面調整はヨコナデ、刷毛目である。

このほか図示できなかったが、縄文時代のものと思われる石鏃と、年代不明の磨石が各１点出土している。

石鏃は頁岩製、磨石は安山岩製である。

第10図　ＳＩ457出土遺物



層	土 色	土 性	特 徴 / 備 考
1	黒 10YR4/6	砂質シルト	しまりあり
2	黒 褐 10YR4/3	砂質シルト	しまりあり
3	暗 褐 10YR4/3	砂質シルト	消滅流砂土。壁の旋坡上を少量含む
4	黒 褐 10YR3/2	砂質シルト	仕切壁の方固めし。ローム層を不均質に含む

第11図　S I 457

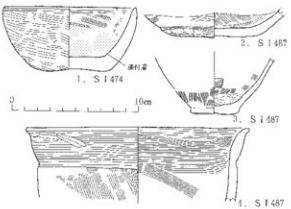
［S I 472］

東西区東端に位置する。S X463、S D459と重複し、これらより古い。掘り下げは行っていないが、竪穴住居の掘り方が溝状に残存したものと思われる。規模は東西約4.3ｍで、平面形は南北がやや長い方形と推定される。掘り方埋め土から土師器の細片が出土している。

［S I 474］

東西区の西端で検出したが、掘り下げは行っていない。S X456・477と重複しておりこれらより古い。

平面形は短辺３ｍ、長辺４ｍ程度の方形と推定される。堆積土中からロクロ不使用の土師器坏が完形で１点出土している（第12図１）。



第12図　S I 474・S I 487出土遺物

口縁部が内湾気味に立ち上がるやや深めの器形である。調整はヘラミガキで内面は黒色処理される。体部内面に漆の皮膜が付着しており、底部ではこれが厚く凝固している。

［S I 475］

南北区南端で検出したが掘り下げは行っていない。S X477、S D479に南半を破壊されている。検出部の北辺は長さ約４ｍである。確認面から土師器の細片が出土している。

［S I 487］

東西区の西寄りで、溝状に残存した掘り方と周溝の一部を検出したが、掘り下げは行っていない。S X456と重複しておりこれより古い。

堆積土（住居掘り方埋め土）は地山層が不均質に混じる黒色土である。周溝は東辺と南辺で一部検出している。幅約15cm、深さ約16cmで黒褐色の自然流入土が堆積している。

掘り方埋め土から土師器が出土している（第12図２～４）。

２は坏で、体下部に沈線が巡る平底である。外面調整は体上部がヘラミガキ、体下部がヘラケズリで外底はヘラミガキされる。内面は黒色処理されている。

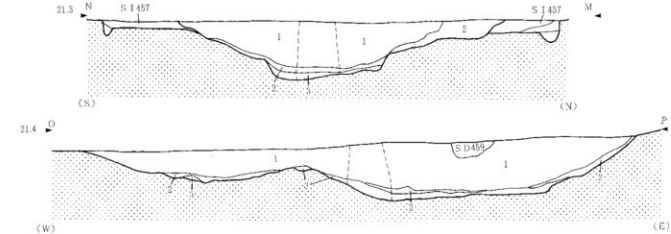
３は甕の底部で、残存部の外面は刷毛目調整されている。

４は甕で、体上部から口縁部が弱く外反し、口縁部と体部の間に沈線が巡る。外面の調整は口縁部がヨコナデ・ヘラミガキ、体部がヘラナデである。

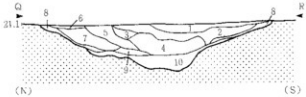
十　壙

［S X456 ］　第13図・第14図

東西区のほぼ中央部に位置する。土壙状の落ち込みが３基連なって溝状の外観を呈し、縁辺は不規則に曲がりくねっている。形態的には土取り痕と類似するが、土壌との関係が把握できなかったため土壙として扱った。S I 457、S I 487、S I 474、S D458、S X476と重複し、S D458より古く他のすべてより新しい。全体の規模は長軸約17.5ｍ、幅3.5～5.5ｍ、深さ77cm～1.2ｍのスリバチ



層	土色	土性	特徴／備考
1	暗 10YR4/4	砂質シルト	地山ブロックを多量に含む
2	暗 褐 10YR3/3	砂質シルト	白粘土と同一の層
3	黒 褐 10YR3/2	砂質シルト	地山ブロックを多量に含む



層	土色	土性	特徴／備考
1	灰黄褐 10YR4/2	砂質シルト	ローム・白色粘土ブロックを不均質に含む
2	暗 褐 10YR3/3	砂質シルト	ローム・白色粘土ブロックを不均質に含む
3	灰黄褐 10YR4/2	砂質シルト	上枝的白色、木炭・焼土を微量に含む
4	暗 灰 10YR4/1	砂質シルト	白色粘土ブロックを不均質に含む
5	暗 褐 10YR3/3	砂質シルト	地山・明黄土のブロックを不均質に含む
6	暗 褐 10YR3/3	砂質シルト	山茂上と地山がブロック状に混じる
7	暗 灰 10YR4/1	砂質シルト	4層となる
8	黒 10YR2/1	砂質シルト	
9	暗 褐 10YR3/3	砂質シルト	
10	黒 10YR1/1	砂質シルト	地山のブロックを不均質に含む

第13図　ＳＸ456

状で、底面にはやや起伏がある。

堆積土は地山層のローム・白色粘土・明黄褐色砂などのブロック(径0.5～5cm)を多量含む黒褐色・暗褐色の砂質シルトである。また、この層は下部に暗褐色土ないし黒褐色土の自然堆積層をまじえている。

土師器の破片が多く出土しているが、いずれも周辺から混入したものと見られる。図示したのは住居跡ＳＩ457との重複部分から出土したものである（第14図1～4)。

1は器台で、受け部外面の下部には段がつく。受け部と脚部の間に径約1.6cmの貫通孔がある。脚部は外反気味に八の字に開き、貫通孔とほぼ同径の円窓が2個残存する。外面調整はヘラミガキで、外面および受け部内面は赤彩されている。

2は壺で、口縁部は内湾気味に外傾する。外面調整は上端がヨコナデ、以下は縦方向のヘラミガキである。

3は甕で、口縁部は強く外反する。外面調整は口縁部がヨコナデ、体部は刷毛目である。

4は台坏甕である。脚部外面は刷毛目調整される。

その他、図示できなかったものには、須恵器甕の体部破片などが含まれている。

［ＳＸ463］

調査区東壁寄りに位置する土壙状の落ち込みで、ＳＩ472、ＳＸ466・470より新しい。平面形は南北に長い楕円形状で、長軸約4.5m、深さ約40cmのスリバチ状を呈する。

堆積土は地山ローム層のブロックを含む黒色土である。

出土遺物は周辺からの混入と見られる土師器の破片で、図示できるものはないが複合口縁の壺と

考えられる口縁部破片などが含まれている。

［ＳＸ465］

調査区南東隅に一部かかる浅い落ち込みで、ＳＤ459より新しい。深さ15～20㎝程度で底面は凹凸が激しい。堆積土は地山ローム層のブロックを含む黒色土である。

出土遺物は周辺からの混入と見られる須恵器坏の底部である（第14図６）。台形状の器形と推定され、底部は手持ちヘラ削りによって再調整される。

［ＳＸ482］

南北区のＳＤ493南辺と土塁ＳＦ489の間で一部を検出した。東西に延びる溝状の落ち込みで、ＳＤ493、ＳＦ489より古く、ＳＤ483よりも新しい。

検出部は長さ5.6ｍ、幅3.2ｍ、深さ31～47㎝で壁は急角度に立ち上がる。底面は比較的平坦であり、ＳＸ477などの土取り痕の形態とはやや異なっている。堆積土は最上層が自然堆積で、以下は焼土塊の投棄層などが見られる人為堆積である。

堆積土から土師器、須恵器が出土している。図示できたのは２点である（第14図11.12）。

11は土師器器台である。体部・口縁部はわずかに内湾し、端部外面は垂直に仕上げられる。調整は外面がヨコナデ、刷毛目、内面はヘラミガキである。

12は須恵器坏で、体部が内湾気味に立ち上がり口縁部は弱く外反する。

土取り痕

［ＳＸ460］　第５図・第14図

東西区東壁にかかる土取り痕で、ＳＤ458・459、ＳＦ489と重複しており、ＳＤ459より新しくＳＦ489、ＳＤ458より古い。

２基の土壙が連なったような形態を呈しており、検出した部分は楕円形状で、長径4.8ｍ、深さ34～65㎝のスリバチ状である。

堆積土はロームブロックを不均質に含むもので、上部は土塁基底部の整地層（Ⅱａ層）に覆われているため、土塁構築の際に埋め戻されたと考えられる。

出土遺物は周辺からの混入と考えられる土師器の破片が多く、図示できたのは１点のみである（第14図５）。

５は複合口縁または有段口縁の土師器壷である。外面調整は口縁上部が刷毛目、ヘラミガキ、口縁下部がヨコナデである。

［ＳＸ477］　第５図・第14図

調査区西壁にかかる溝状の落ち込みで、ＳＤ479、ＳＦ489、ＳＩ474・475、ＳＸ476と重複しており、ＳＤ479、ＳＦ489より古くその他より新しい。

平面形はＳＸ456などと同様に曲がりくねった溝状を呈する。検出部は長軸約６ｍ、幅約2.5ｍ、深さ32～55㎝の皿状で、底面は平坦である。

堆積土は黒色土と地山の灰白色粘土層とがブロック状に混在するもので、人為的な埋め戻しであるが、埋め戻しは完全ではなく上部は窪んでいる。また、これより上部には土塁崩壊土（第５図Ｉ

膚）が認められる。

出土遺物には土師器・須恵器があるが、いずれも周辺からの混入と考えられる。図示できたのは3点である（第14図7.9.10）。7は土師器坏で、体部・口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。ロクロを使用しており内面はヘラミガキ、黒色処理されている。9はロクロ使用の土師器で、長胴甕の口縁部である。10は須恵器の蓋である。

その他の遺構

［ＳＸ462］

東西区東寄りの北壁際で一部検出した遺構である。堆積土の上面は黒色土の自然堆積層で、土師器のミニチュア土器が1点出土している（第14図8）。体上部に段がつき、頸部が外反するもので、体部外面と頸部内面に円形の小刺突が不規則に見られる。

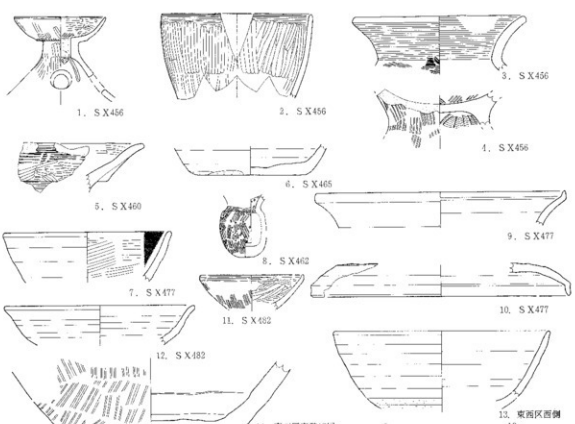
［ＳＸ464］

東西区中央部の北壁際で一部検出した遺構である。ＳＩ457と重複しており、これより古い。重複部の観察では、壁は高さ約20㎝でほぼ垂直に立ち上がっており、竪穴住居である可能性も考えられる。

［ＳＸ490］

東西区の東端で検出した。ＳＤ491ａの堆積土と底面を掘り込んでおり、これより新しい。

検出部は西辺約70㎝、南北両辺が40㎝以上で、深さは40～50㎝ある。平面形は直線的で底面も平坦である。堆積土は、ＳＤ491ａの堆積土を掘り返した土の埋め戻しと考えられる。



第14図　ＳＸ456その他　出土遺物

検出部の形態は柱穴に類似しているが、断面・底面で柱痕跡等は認められなかった。また、掘り下げた部分からは遺物は出土していない。

その他、南北区の北側でＳＸ484～486・492、東西区の東側でＳＸ466・467・470を検出した。これらは形態から溝や土壙と考えられるが、掘り下げを行っていないため詳細は不明である。いずれも確認面から土師器の小破片が出土している。

遺構外からは土師器・須恵器が出土しているが、図示できたのは2点である（第14図13・14）。

13は東西区西側で出土した須恵器坏である。体部・口縁部が内湾気味に立ち上がり、やや深めの器形となる。

14は東西区東壁の土塁直下にある性格不明の落ち込みから出土した、須恵器甕である。

Ⅳ．考　　察

1．古　代

［遺　物］

土師器・須恵器が少量ずつ出土しているが、遺構に伴うものはほとんどなく図示できたものも少ない。土師器には坏（第12図1・2、第14図7）、甕（第9図11・12、第12図3・4、第14図9）があり須恵器には坏（第14図7・12・13）、蓋（第14図10）、甕（第14図14）がある。土師器にはロクロ使用・ロクロ不使用のものとがあり、甕は長胴甕とされる器形である。須恵器のうち坏の器形には皿状のものと逆台形状のものがある。

これらの土師器、須恵器はこれまでの研究成果から8世紀後半～9世紀初頭に位置づけられる（加藤1989、村田1994ほか）。

［遺　構］

出土土器から古代の遺構と考えられるのはＳＤ468、ＳＩ474、ＳＩ487、ＳＸ456・467・477・482である。大溝ＳＤ493は、堆積土中に灰白色火山灰が認められることから古代に位置づけられる。土塁ＳＦ489は、大溝ＳＤ493と一体となって伊治城の外郭線を構成していたとみられるので古代の遺構と考えられ、土取り痕ＳＸ460・463は土塁構築に関わる遺構と考えられることから、ＳＤ493と同様に古代に位置づけられる。

上記の各遺構は、上で述べた8世紀後半～9世紀初頭という年代（＝伊治城の年代観）におさまるものであろう。

［北辺の外郭施設について］　第15図～第17図

今回検出された大溝ＳＤ493と土塁ＳＦ489は、一体となって伊治城北辺の外郭線を構成していたと考えられる遺構である。北辺では昭和52年度調査と12次調査の際に、外郭施設あるいは外郭施設と推定される遺構が検出されているので、それらの調査成果との比較を通して外郭線の状況を検討してみる。

第15図　伊治城外郭北辺 遺構配置図

ＳＤ493は、東側に溝状の窪地として残存する大溝ＳＤ02の西延長線上に位置する。また、西側の12次調査区では幅10ｍ以上の東西方向の溝跡が検出されており、外郭北辺の大溝と考えられているが（築館町教育委員会1990）、ＳＤ493の検出位置はこの大溝の東延長線上でもある。

以上のことからＳＤ493、ＳＤ02、12次調査区で検出された大溝は一連のものと考えられる。

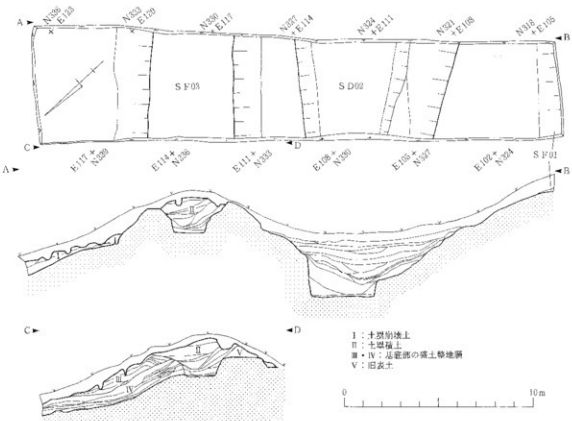
次に土塁について検討してみる。土塁ＳＦ489は大溝ＳＤ493の内側（南側）に構築されている。検出部はⅢ章２で述べた旧校地北側の段の肩とほぼ一致し、この範囲では土塁が残存していると思われる。

昭和52年度調査区では、大溝ＳＤ02の内側（南側）で土塁状遺構ＳＦ01が一部検出されていたが、性格は不明であった。ＳＦ489の位置はおおむねこのＳＦ01検出部の西延長線上にあたり、ＳＦ489とＳＦ01は同一の土塁であると考えられる。

このように、外郭北辺を構成する遺構として、大溝とその内側を巡る土塁の存在を確認することができた。大溝は12次調査区では南辺が南西方向に延びており、検出部の南西約50ｍの地点に入り込んでいる沢に抜けることが想定される（第17図）。

なお、外郭線を構成すると考えられる他の遺構としては、昭和52年度調査区では大溝の外側（北側）で検出された土塁ＳＦ03があり、12次調査区では大溝の北側で検出された東西方向の溝がある。後世の削平や調査区域外であるなどの理由から、今回この両者の延びは確認できなかった。これは今後の課題である。

ところで、これまでの外郭線東辺と西辺の調査成果をみると、まず東辺の16次調査地点（第17図第２地点）では南北に延びる２条の溝が検出されている。幅は3.5～4ｍで内側の溝（ＳＤ201）に灰白色



第16図　SF01．SF03．SD02（宮城県多賀城跡調査研究所1978を一部改変）

第17図　外郭線調査地点と外郭推定線（篠舞町教育委員会1995を一部改変）

火山灰が堆積しており、外側の溝は土取り痕と考えられている（築館町教育委員会1991・1996）。また、これに先立つ8次調査地点（第17図第7地点）でも、古代のものと考えられる南北方向の溝跡が検出されている（築館町教育委員会1989）。

いっぽう西辺では、北部の台地縁辺に沿って南北に延びる土塁と大溝の痕跡が100m以上にわたって認められたといわれ、昭和37年にその一部を撮影した写真が残されているが、堰の改修工事によってすでにその痕跡は失われている（同図第1地点　築館町教育委員会1989）。西辺でその後に行われた22次・23次調査地点（同図第5・6地点）ではいずれも、南北方向の溝1条とその内側で2列の土取り痕が検出されている（築館町教育委員会1996・1997）。

東辺・西辺で検出された溝跡は幅2.6～約5m、深さが0.5～1.3mであり、後世に大きく削平をうけたと考えても、外郭北辺の大溝とは規模が異なっている。

また、北辺の12次調査地点（同図第3地点）では大溝のさらに北側にも溝が存在するのに対して、昭和52年度調査地点（同図第1地点）や東西両辺で検出されている溝跡は大溝が1条のみである。さらに今回の調査地点と西辺では土取り痕が溝跡の内側にあるのに対し、東辺では溝の外側にあるなど、北辺と東西両辺で検出されている遺構には位置関係の上で対応しない点が見られる。中でも問題となるのは、大溝を挟んで2条の土塁が確認されているのが北辺の一部のみであり、他の調査地点ではこれに対応する状況が確認されていない点である。

以上のように外郭の状況は各辺で異なっていることが推察されるため、今後の調査では未調査の南辺も含め、外郭を構成する遺構の位置や変遷をひきつづき検討してゆく必要があると考える。

2．古墳時代

［遺　物］

ＳＤ483、ＳＩ457ほかの遺構から器台、高坏、坏(注1)、壷、甕、甑が出土しているが、出土状況にまとまりを見いだすことはできない。以下では土器の形態的特徴にもとづき、おおよその年代について検討しておく。

ＳＩ457周溝出土の高坏脚部（第11図1）は中空の円錐台状で裾部が大きく開いており、歳王町大橋遺跡1号住居（太田1980）、宮前遺跡53号住居（丹羽1983）、戸ノ内遺跡4号住居（工浜ほか1984）に出土例がある。

堆積土出土の坏（同図2）は体部が小型の半球形で上部にくびれを持ち、口縁部は体部に比べ長いものと推定される。壷（同図3）は屈曲の弱い有段口縁で、名取市野出山遺跡4号・6号住居出土例に類似する（須田ほか1992）。これらの類例は古墳時代前期の塩釜式に位置づけられており、SI457出土土器も同時期のものと考えられる。

ＳＤ459、ＳＤ483ｂ出土土器のうち長胴甕以外のもの（第9図1～11）、ＳＸ456その他から出土している器台、壷、甕、台付き甕（第14図1～5．11）も、ＳＩ457出土土器と同様に塩釜式の範疇に含まれる。

塩釜式は1957年の氏家和典氏による設定以来、丹羽茂氏（1985）をはじめとして、次山淳氏（19

92)、辻秀人氏(1995)による細分が行われているが、今回の出土土器を総体的にみれば丹羽の第Ⅱ段階、辻のⅡ－2～Ⅲ－3期に位置づけられるものが主体を占める。

〔遺　構〕

ＳＩ457、ＳＤ483は出土土器から古墳時代前期に、ＳＤ459は古墳の周溝と考えられることからそれぞれ古墳時代に位置づけられる。

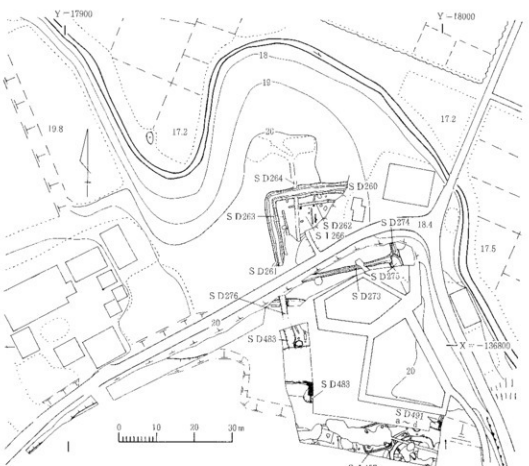
ＳＸ464はＳＩ457と重複しており、これより古いことから古墳時代前期かそれ以前と考えられる。

このうち、これまでの調査との関連から注目される遺構はＳＤ483である。

［ＳＤ483の性格について］　第15図・第18図

ＳＤ483は北から延びて屈曲し、東へ延びる溝跡である（注２）。検出部の北側では12次・18次調査が行われており、溝跡ＳＤ260・261およびＳＤ273・274が検出されている（第18図）。これらの溝跡からは、丹羽の塩釜式第Ⅱ段階に位置づけられる一括資料が出土しており、東西28ｍ南北20ｍほどの方形区画を構成する、古墳時代前期の豪族居館と考えられている。各地の豪族居館調査例との比較、立地や規模、居住者などについてはすでに検討がなされている（佐藤　前掲）。

ＳＤ483の北延長線は豪族居館の溝ＳＤ261の南延長線に一致しており、出土した土器は量的には少ないが、豪族居館の溝から出土した土器とほぼ同時期である。したがってＳＤ483とＳＤ261は一連の遺構であり、12次・18次調査で検出した豪族居館の南側には、同時期の別の区画が存在すると考えられる。



第18図　古墳時代前期　遺構配置図

ＳＤ483による区画は西辺の規模が20ｍ以上とみられるが、東西区東端で検出したＳＤ491ａ～ｄから遺物が出土していないため、東への延び（区画南辺）については方向・規模とも明確ではない。

ＳＤ483とＳＤ491ａ～ｄは堆積土が類似することから、ＳＤ491ａ～ｄのいずれかがＳＤ483の東延長部に対応する可能性はあるが、その場合区画の平面形は、12次・18次調査で検出したような整った方形ではないことになる。

いっぽう12次・18次調査で検出した区画の南東隅にあたる位置では、ＳＤ273・274と重複する南北方向の溝ＳＤ275が検出されている。一部の検出であるため規模は明確ではないが、出土した土器から塩釜式期の遺構と考えられるので、ＳＤ483と同様に豪族居館を区画する東側の溝と考えられる。

このような複数の区画をもつ豪族居館の例としては、関東以北の古墳時代前期では栃木県四斗薪遺跡がある（橋本1991）。

四斗薪遺跡では濠と柵列などの囲郭施設を持つ方形の遺構が２基検出されている。遺構の規模は当遺跡で検出したものより大きく、それぞれ東西39ｍ南北41ｍと東西約43ｍ南北約52ｍである。このうちの１基では上記の囲郭施設のほかに、土塁、濠にかかる橋脚跡や大型竪穴住居１棟が検出されたが、２基間の前後関係や一方の区画内の詳細な状況は不明であるという。

当遺跡の12次・18次調査で検出した区画の内部では、盛り土がなされた可能性が指摘されているほか、柵跡と見られる布掘り溝や（ＳＤ262・263）竪穴住居跡ＳＩ266が検出されている。住居跡はすでに削平をうけており年代は不明だが、濠と柵による閉鎖的な囲郭施設を持つという点で、当遺跡は四斗薪遺跡と同様な特徴を持つといえる（見須1996　注３）。

以上のように、ＳＤ483の検出によって豪族居館がさらに南に広がりを持つことが明かとなり、区画の西辺についてはおよその規模をとらえることができた。しかし、溝跡以外の囲郭施設の有無や区画内部の状況は不明であった。

なお区画外の状況に関しては、塩釜式期の竪穴住居ＳＩ457を確認できたことから、豪族居館の周辺にも同時期の遺構が広がることを予測できよう。

（注１）辻氏の分類では鉢に相当する（辻　前掲）。

（注２）南北区北側に接する12次調査区でも、ＳＤ261と同じ方向に延びるＳＤ276が一部検出されている。ＳＤ276は、灰白色火山灰を堆積土に含む東西方向の溝より新しいとされているため、図版の表現はこれに従った。しかしＳＤ276は上幅1.4ｍ、下幅0.7ｍ、深さも0.8ｍほどでＳＤ483とほぼ同等の規模であり、検出位置もＳＤ483やＳＤ261の延長上であることから、ＳＤ483やＳＤ261と一連の溝である可能性が高い。

（注３）見須俊介氏による豪族居館の平面類型分類では③に該当する。四斗薪遺跡のほか茨城県国生本屋敷遺跡、栃木県堀越遺跡、群馬県丸山遺跡・荒砥荒子遺跡、京都府森山遺跡があげられている。

引用・参考文献

阿部　義平　(1990)「宮殿と豪族居館」『古墳時代の研究２　集落と豪族居館』

天野　順陽　(1994)「下草古城跡」『下草古城跡ほか』　宮城県文化財調査報告書 第160集

岩見　和泰　(1993)「Ⅱ－３集落各説　(5)伊治城跡」『シンポジウム２　東日本における古墳出現過程の再検討』
日本考古学協会1993年度新潟大会資料

氏家　和典　(1957)「東北土師器の型式分類とその編年」『歴　史』第14集

太田　昭夫　(1980)「大橋遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』　宮城県文化財調査報告書 第71集

加藤　道男　(1989)「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』　芹沢長介先生還暦記念論文集

桑原　滋郎　(1997)「多賀城と東北の城柵」『多賀城市史１　原始・古代・中世』

(1998)「城生柵跡と栗切谷廃寺跡」『新編　中新田町史　上巻』

佐久間光平・小村田達也ほか　(1995)『佐沼城跡－近世武家屋敷と古代の集落跡』
迫町文化財調査報告書 第２集

佐藤　憲幸・村田　晃一　(1996)「東北の装飾具」『古代の土器研究会 第４回シンポジウム資料』

佐藤　則之　(1992)「Ⅵ. 第18次調査」『伊治城跡－平成３年度発掘調査報告書』
築館町文化財調査報告書 第５集

白鳥　良一　(1980)「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』　宮城県多賀城跡調査研究所

進藤　秋輝　(1991)「城柵の設置とその意義」『北からの視点』
日本考古学協会宮城・仙台大会シンポジウム資料集

須田　良平・吾妻　俊典ほか　(1992)『野田山遺跡』　宮城県文化財調査報告書 第145集

辰巳　和弘　(1991)「豪族居館の諸相」『季刊考古学』第36号

次山　淳　(1992)「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『宍塚』　埋蔵文化財研究会15周年記念論文集

辻　秀人　(1993)「東北南部の古墳出現期の様相」『シンポジウム２東日本における古墳出現過程の再検討』
日本考古学協会1993年度新潟大会資料

(1994)「東北南部の古墳出現期の土器編年 その１ 会津盆地」『東北学院大学論集歴史学・地理学』第26号

(1995)「東北南部の古墳出現期の土器編年 その２」『東北学院大学論集歴史学・地理学』第27号

手塚　均　(1980)「鶴の丸遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』　宮城県文化財調査報告書 第81集

十崎山　武　(1980)「安久東遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』　宮城県文化財調査報告書 第72集

丹羽　茂　(1983)『宮前遺跡』　宮城県文化財調査報告書 第96集

丹羽　茂　(1985)「今熊野遺跡Ⅰ－古代編－」『今熊野遺跡　本杉遺跡　馬越石塚』
宮城県文化財調査報告書 第104集

芳賀　英美　(1995)『田道町遺跡』　石巻市文化財調査報告書 第７集

橋本　博文　(1991)「関東北部の豪族居館」『季刊考古学』第36号

見須　俊介　(1996)「古墳時代の「豪族居館」研究上における問題点と平面類型」『權原考古学研究所研究紀要　考古学論攷』第20冊

宮城県文化財保護課編　(1976)『山前遺跡』　小牛田町教育委員会

村田　晃一　(1994)「土器からみた官衙の終末－東北地方の場合」『第３回埋蔵文化財研究会　古代官衙の終末をめぐる諸問題　資料』

結城　慎一・工藤　哲司　(1979)『史跡遠見塚古墳 昭和53年度環境整備予備調査概報』
仙台市文化財調査報告書 第15集

渡辺　紀・吉岡　恭平　(1995)『伊古田遺跡…仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ－』
仙台市文化財調査報告書 第193集

付表１　『伊治城跡』調査および報告書一覧

◎多賀城跡調査研究所による調査

年　次	調　査　内　容	発掘面積	発掘期間	備　　考	文献
昭和51年度 (1976)	地形図作成（航空測量） 現地踏査・研究史整理				
昭和52年度 (1977)	①北辺外郭線発掘調査 中央平坦部地区発掘調査	168㎡ 270㎡	7／4～8／3	大溝１、土塁１、土塁状遺構１ 焼失竪穴住居１、墨書土器「域刺」	(1)
昭和53年度 (1978)	②中央平坦部地区発掘調査 西辺外郭線地区電気探査	780㎡	7／3～8／4 11／11～11／13	竪穴住居４、掘立柱建物１、井戸６、溝５、土壙４	(2)
昭和54年度 (1979)	③中央平坦部地区発掘調査	1,000㎡	10／29～12／4	竪穴住居17、掘立柱建物２、井戸、溝、土壙	(3)

◎築館町教育委員会・宮城県文化財保護課による調査

昭和62年度 (1987)	1．農道整備 2．農協支所移転 3．個人住宅便槽取付 4．水道管埋設 5．農道整備 6．倉合建築	220㎡ 150㎡ 2㎡ 1,250㎡ 1,080㎡ 80㎡	7／1～8　12 7／4～7／18 8／5 9／1～9／14 1／18～2／9 2／25	竪穴住居５(うち焼失住居１)、溝４、井戸１ 竪穴住居５、土壙１ 竪穴住居８ 竪穴住居７、土壙２、溝	(4)
昭和63年度 (1988)	7．国庫補助事業 8．水道管埋設 9．農道整備	1,500㎡ 142㎡ 501㎡	7／1～10　30 11／4～11／24 2／6～2／12	内郭区画溝２、竪穴住居２、土壙、円形周溝１ 東辺外郭大溝１？、竪穴住居３、溝	(5)
平成元年度 (1989)	10．宅地現状変更 11．国庫補助事業 12．通学路整備 13．農道整備 14．水道管埋設	480㎡ 1,200㎡ 1,700㎡ 1,960㎡ 170㎡	4／11～6／1 7／21～11／22 9／5～9／16 10／16～1／10 11，29～12．8	竪穴住居８、掘立柱建物１、土器埋設土壙１ 内郭区画溝１、掘立柱建物３、竪穴住居９ 北辺外郭大溝２、古墳時代前期溝１ 内郭区画溝２、〔政庁域〕掘立柱建物・溝 竪穴住居３	(6)
平成２年度 (1990)	15．国庫補助事業 16．道路整備（人尾線）	900㎡ 1,320㎡	9／3～9／29 9／27～10／5	掘立柱建物３、竪穴住居８、円形周溝１、井戸２ 東辺外郭人溝２？、竪穴住居16、溝、井戸、土壙	(7)
平成３年度 (1991)	17．国庫補助事業 18．個人住宅	1,300㎡ 300㎡	5／27～7．16 11／19～12／2	〔政庁域〕正殿・後殿・脇殿・築地 古墳時代居館跡	(8)
平成４年度 (1992)	19．国庫補助事業	1,300㎡	5／11～7／4	〔政庁域〕正殿・後殿・脇殿・南門・築地 〔内郭南側〕掘立柱建物、竪穴住居、溝、土壙	(9)
平成５年度 (1993)	20．国庫補助事業	1,500㎡	10／4～11／18	〔内郭南東隅〕築地、掘立柱建物、竪穴住居 〔内郭南側〕掘立柱建物、竪穴住居、土壙墓	(10)
平成６年度 (1994)	21．国庫補助事業	820㎡	10／3～11／27	〔内郭北側〕掘立柱建物、竪穴住居、溝 〔内郭南側〕掘立柱建物、竪穴住居、古墳	(11)
平成７年度 (1995)	22．国庫補助事業	1,140㎡	10／5～11／14	〔内郭北側〕掘立柱建物、土壙 〔外郭南西側〕南西辺大溝跡１、溝状遺構２	(12)
平成８年度 (1996)	23．国庫補助事業	450㎡	10／7～11／7	〔外郭北西側〕大溝１、溝状遺構２、 竪穴住居１、柱列１、土壙	(13)

(1)宮城県多賀城跡調査研究所	1978	『伊治城跡Ⅰ－昭和52年度発掘調査報告－』	「多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第３冊」
(2)　〃	1979	『伊治城跡Ⅱ－昭和53年度発掘調査報告－』	「多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第４冊」
(3)　〃	1980	『伊治城跡Ⅲ　昭和54年度発掘調査報告－』	「多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第５冊」
(4)築館町教育委員会	1988	『伊治城跡－昭和62年度発掘調査概報－』	「築館町文化財調査報告書第１集」
(5)　〃	1989	『伊治城跡－昭和63年度発掘調査概報－』	「築館町文化財調査報告書第２集」
(6)　〃	1990	『伊治城跡　平成元年度発掘調査概報－』	「築館町文化財調査報告書第３集」
(7)　〃	1991	『伊治城跡』	「築館町文化財調査報告書第４集」
(8)　〃	1992	『伊治城跡－平成３年度発掘調査報告書－』	「築館町文化財調査報告書第５集」
(9)　〃	1993	『伊治城跡　平成４年度発掘調査報告書－』	「築館町文化財調査報告書第６集」
(10)　〃	1994	『伊治城跡－平成５年度発掘調査報告書－』	「築館町文化財調査報告書第７集」
(11)　〃	1995	『伊治城跡－平成６年度発掘調査報告書－』	「築館町文化財調査報告書第８集」
(12)　〃	1996	『伊治城跡－平成７年度：第22次発掘調査報告書－』	「築館町文化財調査報告書第９集」
(13)　〃	1997	『伊治城跡－平成８年度：第23次発掘調査報告書－』	「築館町文化財調査報告書第10集」

付表2　伊治城および栗原郡に関する古代史年表

西暦	和暦	記事	文献
767	神護景雲1	10．伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守将軍田中多太麻呂らに叙位、外従五位下道嶋三山は従五位上を賜う。	続日本紀
768	2	12．陸奥や他国の百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免ずる。	続日本紀
769		1．伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。	続日本紀
	3	2．桃生・伊治に板東8国の百姓を募り安置しようとする。	続日本紀
		6．栗原郡をおく。これはもと伊治城である。 （「続日本紀では神護景雲元年11月乙巳条に収めるが錯簡とみられ、ここでは神護景雲3年6月9日乙巳説をとる）	続日本紀
		6．浮浪の百姓2,500人を伊治城に遷す。	続日本紀
780	宝亀11	3．上治郡大領伊治公呰麻呂は牡鹿郡の大領道嶋大楯、按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで、多賀城にせまり府廨の物をとり放火する。	続日本紀
792	延暦11	1．斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の俘に妨げられて果たせないでいることを訴える。	類聚国史巻190
796	15	11．伊治城と玉造塞の中間に1駅を置く。	日本後紀
		11．相模・武蔵・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後などの俘民9,000人を伊治城に遷し置く。	日本後紀
804	23	11．栗原郡に3駅を置く。	日本後紀
837	承和4	4．3年春より百姓の妖言に奥邑の民が動揺し、栗原・賀美両郡の百姓多く逃亡する。また、栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵1,000人を差発して非常に備える。	続日本後紀
905	延喜5 （着手）	延喜式 ○神名式　陸奥国100座 栗原郡7座　大1座　表乃神社 小6座　志波姫神社 雄鏡神社 駒形根神社　和我神社 香取御児神社　遠流志別石神社 ○民部式　東山道・陸奥国大国 ……志太、栗原、磐井…… ○兵部式　陸奥国駅馬 ……玉造、栗原、磐井……各5疋	
931 〜 938	承平年間	和名類聚抄　陸奥国 栗原郡（久利波良） （郷名）栗原・清水・仲村・会津	和名類聚抄

報告書抄録

ふりがな	いじじょうあと
書名	伊治城跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	築館町文化財調査報告書
シリーズ番号	第11集
編著者名	伊藤　裕
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町3-8-1　TEL　022-211-3682
発行年月日	西暦　1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
伊治城跡（いじじょうあと）	宮城県 栗原郡築館町（くりはらぐんつきだてまち） 字城生野（あざじょうのう）	045217	41007	38度45分50秒	141度02分40秒	19971006 ～ 19971107	480	外郭確認ほか

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
伊治城跡	城柵跡	奈良～平安時代	大溝跡	1条	土師器	外郭大溝の内側で土塁を確認
			土塁	1条	須恵器	
			土取り痕	3基		
			竪穴住居跡	4軒		
		古墳時代	溝跡	5条	土師器	古墳時代前期の豪族居館に伴う溝跡を確認
			円形周溝	1条		
			竪穴住居跡	1軒		

写真図版1　伊治城跡全景（1984年撮影）

調査区遠景（北から）

調査区全景（北から）

写真図版2

南北区（北から）

東西区（東から）

写真図版３

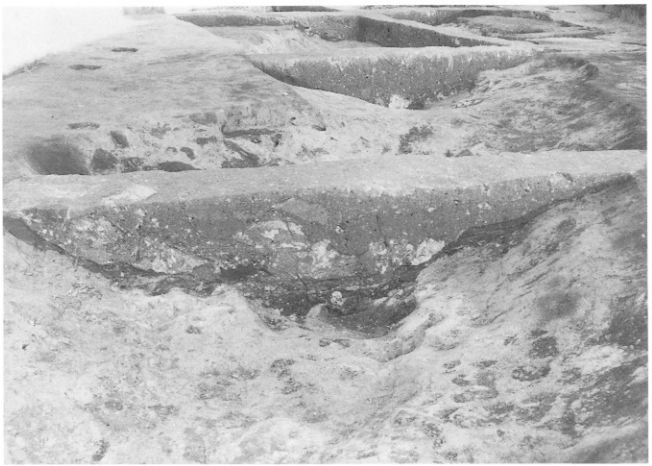
ＳＸ456とＳＩ457（南西から）

写真図版４　　ＳＦ489（奥）とＳＸ4777（手前）

ＳＦ489（南北区西壁）

ＳＸ456断面（南から）

写真図版５



ＳＸ456西端断面（西から）

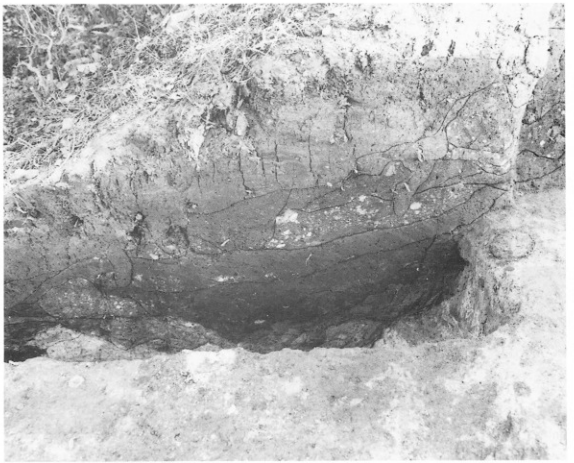
写真図版６

ＳＸ460（南から）

ＳＸ482（南北区西壁）

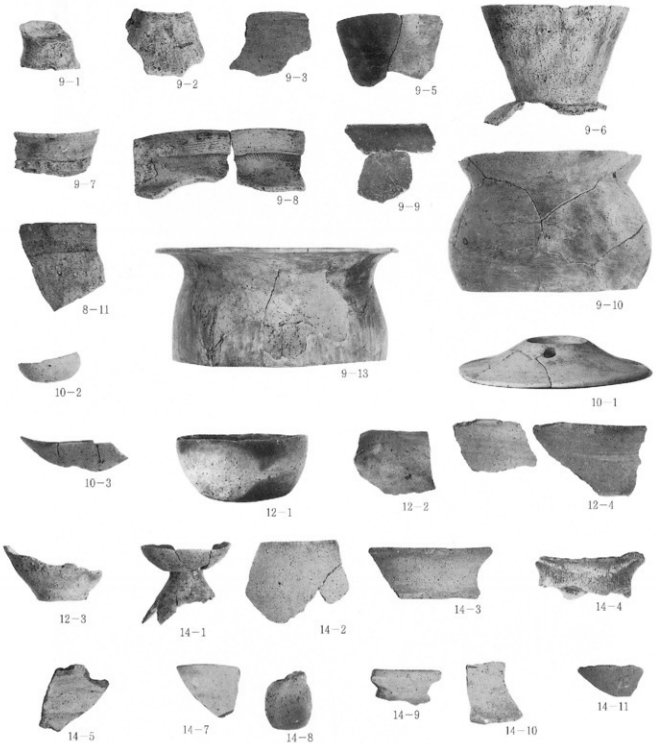
ＳＤ483（南北区東壁）

写真図版７



ＳＤ491ｃ・ｄ（東西区東壁）

写真図版８　　ＳＤ491ａとＳＸ490（東西区東壁）



写真図版9　出土遺物　(1／3)

(注) 写真番号は実測図の番号に対応

築館町文化財調査報告書　第11集

伊　治　城　跡

印　刷　平成10年３月25日
発　行　平成10年３月31日

発　行　財団法人
宮城県文化財保護協会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号

印　刷　㈱小野寺印刷所
宮城県栗原郡築館町伊豆一丁目7-3